

シンポジウム「ロシア革命前における仏露関係」(2011年12月16日)

## 近代フランスにおけるロシア社会論

鈴木 健夫 (早稲田大学)

近代ロシアの人びとにとって西欧諸国は自らの進むべき道を考える上で重要な議論の対象であった。もとよりピョートル1世によって開始されたロシアの「近代化」は「西欧化」であったのであり、その後のエカチェリーナ2世の改革、そして19世紀に入ってからの諸改革も、西欧諸国からいかに学ぶか、あるいはそれにいかに対峙・対抗するか、が大きなポイントとなつた。こうした西欧諸国の中ではフランスは、当然のことながら、非常に重要な位置を占めていた。1840—50年代にはロシアの論壇において「ロシアとヨーロッパ」問題が激しく議論されたが、フランスは、西欧派の経済的自由主義者ストゥルコフにとっては目標とすべき小土地所有の社会であり、そこでは土地所有の確保と自由な労働による私的利潤の追求が農業の発展を促進していた。それにたいして、「相互愛にもとづいた自由と統一」の正教と農村共同体を思想的基盤とするスラヴ派ホミヤコフにとっては、フランスは「自由を犠牲とした統一」しか実現していないローマ・カトリックと「統一を犠牲とした自由」しか実現していないプロテスタントの西欧の一国であり、その土地細分の土地所有はプロレタリアート・貧窮の出現を防止しているものの、精神的エゴイズムを蔓延させ、道徳の貧困を生み出していた。そして、社会主義者ゲルツエンにとっては、1847—48年に大きな憧れをもって訪ねた革命フランスのパリは、その期待とは反対に、満ち足りたブルジョアの俗物文明と醜悪な道徳的堕落の都市であり、そこには民衆の息吹を打ち消す死の影があった。ゲルツエンは、その後、ロンドンに亡命し、ブルジョア自由主義を激しく非難し、出版活動を通してロシア国内の革命運動を支援することになる。

近代ロシアの人びとがこのようにさまざまに論じた当時のフランスの人びとは、ロシアをどのように見ていたのであろうか。この問題については、当時の人びとのロシアへの個々の言及が従来でも研究の対象になってきたが、最近のアダモフスキイ (Ezequiel Adamovsky) の一連の研究 (主著は*Euro-Orientalism: Liberal Ideology and the Image of Russia in France (c. 1740-1880)*, Berlin, 2006) はまさにこの問題を歴史的・包括的に論じ、豊かな成果を挙げている。彼の研究から近代フランスには膨大な量のロシア論があつたことが明らかとなっている。本報告は、このアダモフスキイの業績に大いに依拠し、それにナールデン (Bruno Naarden) の研究 (*Socialist Europe and Revolutionary Russia: Perception and Prejudice 1848-1923*, Cambridge, 1992, Chap. 1, The Western European Image of Russia) などや報告者自身のこれまでの研究の成果を加え、この大変興味深いテーマに対して今後の研究のための一つの仮の見取り図を示しておこうというものである。対象の時期はロシアで農奴解放が実施される1861年あたりまでとする。

\*

近代フランス人によるロシア論の問題に入る前に、当時のロシアの社会の現実をどのように理解したらよいのか、報告者自身の研究から、整理をしておきたい。

18世紀初頭にピョートル1世は、周知のように、自国ロシアをヨーロッパの列強とすべく、北はバルト海進出をめざしてスウェーデンと戦い、南は黒海の制覇を意図してトルコに向かった。この野望の実現のためには、いうまでもなく、軍事を始めとする強力な国力が必要であった。ピョートルは、西欧諸国を範として、軍需産業を育成し、兵役制を導入し、行政・教会などの諸制度を改革した。しかし、この近代化＝西欧化の改革実現のための財源は政府内に乏しく、それは人口の大半を占める農民からの徴税に求められた。全国的な人口調査が実施され、農民（農奴）の男子すべてに人頭税を課する制度が導入された。農民は、領主への諸義務（賦役・貢租）の他に、国にたいして、兵役の遂行と人頭税の納入を義務付けられたわけであるが、これは、専制の強化であり、農奴制の強化であり、そして共同体的秩序（ミールあるいは後にオプシチナとも呼ばれる農村共同体）の強化であった。当時のロシア中央部に広く存在していた農村共同体は、公的な団体ではなかったが、村民の義務遂行を連帶責任とし、その義務および土地を労働力単位によって村民に均等に配分し、各農家の労働力の変化に応じて定期的に再配分（定期的割替）することを慣行していた。この共同体は農村生活の場として相互扶助などさまざまな活動を行っており、ときに農民の反抗の拠点ともなったが、農奴制・ツアーリズムを強力に支えてもいた。こうして、ピョートルによって開始され19世紀へと受け継がれていくロシアの近代化は、その目標は西欧にあったが、その現実はますます非西欧化していたともいえよう。

\*

さて、このようなロシアについてフランス人はどのように論じていたのであろうか。

#### 「野蛮な国」——伝統的なロシア像

まず、近代化が開始される以前のロシアについてみると、もとより西欧の人びとにとっては知られるところが少なかつたが、それでも16、17世紀に出版されたハーバーシュタイン、フレッチャー、オレアリウスなどによるにいくつかのロシア旅行記から、ひとつのイメージが形成された。それは「野蛮の国」というイメージである。フランス人のあいだでもロシア人は野蛮人、酒飲み、男色、奴隸的と評され、ロシア政府は野蛮、アジア的、専制的と形容されたといわれ、ロシアはヨーロッパの外にある世界と位置づけられた。こうしたロシア像は定着し、その後もながく伝統的に維持されていくことになる。

#### 「白紙状態の国」——啓蒙主義者のあいだでの論争

ロシアを「白紙状態tabula rasa」の国とみる議論はドイツの思想家ライプニッツにはじまるといわれ、これがフランスの啓蒙主義者に受け継がれ、その評価をめぐって論争がおこった。も

とよりライプニッツは、ヨーロッパは精神的危機にあるという認識を踏まえ、ロシアは野蛮ではあるが理性にしたがって最良の社会秩序を受け入れることができる「白紙状態」の国であるとして、1711年に実際に会見したピョートル1世は知性と権力の体現者で、その改革によって新しい合理的社会を創造していると高く評価したが、このような肯定的評価は、ロシアの宮廷とも親しかったヴォルテールに受け継がれた。ヴォルテールによれば、ピョートルは野蛮の王国であったロシアを啓蒙（理性）によって新しい国につくり変え、ロシアを再びヨーロッパの家族に引き入れたのであり、そしてさらに、ロシアはいまや啓蒙の闘いの前衛となっており、ヨーロッパの君主はピョートルのように理性の光に従うべきであるという。このヴォルテール的なロシアの肯定的評価は何人の支持を得、広く普及した。

しかし、他方で、ロシアに対する否定的評価も活発に議論された。モンテスキューはその『法の精神』によってエカチェリーナ2世の政策に大きな影響を与えた思想家であるが、彼はロシアについて次のように論じている。ロシア人は本来はヨーロッパ人であったが、「タールのくびき」によってその国にアジア的慣習がもちこまれ、ピョートル1世は自國を本来の姿に戻そうと改革を行った。しかし、彼の西欧化の改革は生活様式を法律によって変えようとした暴挙であり、ロシアは自由を実現するに不可欠な要素——第三身分——を欠如する空虚な空間となってしまった。ロマン主義的な思想家ルソーもまた、『社会契約論』のなかで、ピョートルの改革はヨーロッパ文明の表面を単に模倣したにすぎないとして、その偽物性を指摘し、最初からドイツ人やイギリス人をつくるのではなくロシア人をつくることから始めるべきであった、と論じた。国民の個性（慣習）にもとづいた歴史の展開をめざすべきであったというのである。エカチェリーナ2世との面談に招かれてロシアを訪ね、肯定的評価から否定的評価に転換した人物として、ディドロがいる。彼は、ロシアは啓蒙主義の理念を植え付けるための理想の「白紙状態の国」であるとし、農奴解放、外国人入植地の建設、第三身分の形成を通じて文明化と経済発展の実現を期待したが、ロシアの現実に失望し、ロシアは「肥沃な白紙状態」ではなく「何もない、不毛の土地空間」である、と断じることになる。以上のような否定的評価についても、それをさまざまに支持する数多くの追随者が現れた。

### 「中間層欠如の国」——自由主義者の否定的評価

ナポレオンの登場、そして戦争によって、北方の野蛮な国ロシアに対する脅威論が強まった。パリでは、ピョートルが世界征服の計画を記したという「遺書」が1812年にルシュールの著書のなかで紹介され、その後、1836年にも18世紀中葉にロシア駐在のフランス外交官が筆写したというその「遺書」が公表されたりした。この「遺書」は偽作であるというのが通説になっているが、この出来事はロシアの侵略性にたいする警戒心の表れである。こうしたなかでその後のフランスにあっては、前世紀に論じられていたロシア論のうち、モンテスキューおよび晩年のディドロなどに見られた否定的評価が、すなわち文明化の推進者である中間層を欠如した国ロシアという議論が、自由主義的な数多くの政治家や著述家によって支持され、広められていった。その言説は枚挙に遑がないほどであり、アダモフスキイによれば、1840年代初頭のロシア論のほと

んどすべてにおいて「中間層の欠如」が決まり文句となっていたという。イギリス（商業）とロシア（戦争）をヨーロッパ社会の二つの脅威とみなし、ドイツ（感情）とフランス（思想）の同盟によってヨーロッパ文明の精神的均衡をめざしたユゴーにおいても、そのロシア論は私有財産・中間層を欠如する専制の国という理解がその基底にあった。キュスティーヌは、貴族でありながら革命軍に身を投じた祖父およびそれを庇った父がそれでも後に反革命の容疑で断頭台に送られるという家に生まれ育ち、したがっていわば反近代主義者として、1839年に三ヶ月ロシアに滞在した。そこで目の前にしたロシアは、全能の専制君主のもとで国民が等しく抑圧されており、野蛮でアジア的で、きわめて不快な社会であった。貴族層も皇帝権力をチェックする力をもたず、野蛮を文明へと導く中間層が存在していなかった。彼は近代主義者となって帰国することになる。

こうして「中間層欠如の国」という否定的ロシア像がフランスにおいて主流となっていくが、ロシアについてはこれとは異なる議論もおこってくる。一つは「秩序の国」ロシアであり、もう一つは「共同体・平等主義の国」ロシアという議論である。

### 「秩序の国」——伝統志向の保守主義者による肯定的評価

アダモフスキイはロシアのなかに不穏なヨーロッパが従うべき秩序をみようとした人物として何人かに言及しているが、そのなかでバルザックは、フランス政府と成り上がりのブルジョアジーを激しく批判する一つの手段として、ロシアに言及しているという。自由主義・社会的平等・中間階級の政治的能力に懷疑的であった彼は、フランス人の「規律のはなはだしい欠如」よりはロシアの絶対専制の秩序をよしと議論した。社会学者のコントトル・プレもまた、ロシアをヨーロッパの手本と考える秩序志向者であったようである。コントは、凡庸な指導者によって支配されているヨーロッパこそ計り知れぬ病にあり、ロシアの皇帝権力は貴族的社会の再生には必要で、その階層的秩序を賞賛した。西欧諸国だけでなくロシアの農村にも深く入り込んで実情を調査したル・プレは、自らは私的所有を支持しつつも、家族・領主・農民関係、共同体の在り方から社会的平和を維持しているロシアの社会システムを賞賛し、そこには自由と平等という誤った理論に毒されているヨーロッパがその不安定から抜け出る道が示されていると論じた。彼は、1861年の農民改革によってロシアはそれまでの「強制的アソシエーション」から解放され、共産主義とは異なる「自発的アソシエーション」に向かいつつあるとみていた。

### 「共同体・平等主義の国」——肯定的評価と否定的評価

当時のロシアに広く存在していた農村共同体の活動にみられる平等主義の原則がロシア社会の本質とみて、さらにはその原則が社会主义・共産主義につながるとみて、さまざまな議論が登場することになるが、こうした原則をフランスに紹介した外国人が三人いた。一人は、1840年から1844年にかけてコレージュ・ド・フランスで「スラヴの言語と文学」を担当したポーランドの詩人ミツキエヴィチで、彼は、ツァーリ体制を敵としながらも、共同体はその専制とは区別されるスラヴの本質的基盤であるとして、ロシアの共同体社会は望ましい社会であり、西洋が直面

している私有財産と社会的不安の問題を蒙ってはおらず、急進的な改革者が建設しようとしている新しい社会を予測させると主張した。また、1840年代末にフランス社会を実見して失望したゲルツエンも、その著作のなかで、君主制の重みの下でも生きてきたロシアの共同体は民主的な制度であり、将来の社会主义社会の最良の基盤となると主張し、ロシアはヨーロッパの危機からの脱出の道を指し示すことができる、と指摘した。しかし、ロシアの共同体的秩序の紹介者としては、プロイセンの官吏ハクストハウゼン (August von Haxthausen) の著作がもっとも大きな影響力をもつたことは確かである。1843年に半年間かけて広大なロシア全国を視察旅行した彼は、帰国後に出版した『ロシア研究』3巻 (1847、1852年) のなかでロシアの農村にみられる家父長制・平等・土地共有の共同体的秩序を具体的に紹介し、ロシアにはプロレタリアートの出現の余地がなく、西欧の苦痛とはまったく無縁な理想郷がそこにあると指摘した。この書物はすぐにフランス語版 (1853年) が、そして英語版 (1856年) が出版され、西欧で広く読まれることとなる。

ハクストハウゼンによる「ミールの発見」(エンゲルス) は、その君主主義的思想にもかかわらず、ヨーロッパの社会主义的ユートピアの形成に寄与したが、フランスにおいても、ロベール (Cyprien Robert) などはスラヴの共同体には西洋の夢である友愛と平等が現実となっているとし、その健全な社会主义的要素は国家中心主義を避けることによってヨーロッパを救うことができると考えた。しかし、自由主義者にとっては、専制ロシアの共同体にみられる社会主义的要素は悪夢であり、地獄であった。彼らは、西ヨーロッパに生まれた社会主义・共産主義思想を東方のものとして拒否し、自らの国をアメリカの社会を視野に入れて議論しようとした。ハクストハウゼンの書物が出版される前に書かれた『アメリカのデモクラシー』第1巻のなかでトクヴィルは、アメリカとロシアは同じゴール (平等化) に向かっているが、前者は個人の自由によって、後者は絶対的権力者・隸従によってという違いがあると記し、ハクストハウゼンの書物を読んだ後のボモン (Gustave de Beaumont アメリカ旅行同行者) 宛書簡 (1853年11月3日付) のなかでは、ロシアの均一の社会は民主的社會のようにみえるが、啓蒙と自由がなく、人を恐れさせる、と述べた。この書簡を受け取ったボモンは、翌年の雑誌*Revue des deux mondes*に掲載された論文において、ハクストハウゼンのロシア社会論を批判しつつアメリカとロシアを比較し、アメリカの自由の原則に基づく物質的利益の追求は進歩の源泉であるが、ロシアの農民共同体の共産主義的な平等主義は進歩と文明の障害となると断じた。アダモフスキイの少々誇張した表現にしたがえば、アメリカかロシアか、自由主義か共産主義かの選択は、自由主義者が民主主義の時代にヨーロッパに示そうとした近代の岐路の一つの思想的選択であったといえるかもしれない。ともあれ、工業発展と中間階級を進歩の動力と考え自由を守護する人たちにとって、ロシアの共産主義的な平等主義は否定すべきものであり、そうした見方はミュレなどの著作にも、また議会での議論のなかにも、見られた。

近代フランスにおいては、その後も、時代とともにいくつものロシア論が登場し、またアントール・ルロアーボーリュー (Anatole Leroy-Beaulieu) などの優れたロシア研究者が何人も現

れるが、ともあれ本報告が対象とした時期にあっては、ロシア社会をどのように理解するかは、それを肯定的に見るにせよ否定的に見るにせよ、それぞれの立場の人たちが自らの思想を形成し展開・主張していくことに非常に深く関わっていたということができる。そしてそのことは、近代ロシアの人びとにとってフランスが彼らの思想形成の際に非常に重要な位置を占めていたことに符合するともいえ、両国の諸思想の間にさまざまに交差する相互の流れを認めることもできよう。近代の仏露関係のきわめて興味深い思想史の課題がここにある。

注記 報告者に当の問題を考える機縁を与えてくれたのは若いトクヴィル研究者の高山裕二氏であり、同氏からは本稿の作成に際しても貴重なコメントをいただいた。ここに心からの謝意を表しておきたい。ただし、本稿の内容についての責任はいうまでもなくすべて報告者自身にある。

(2012年1月27日脱稿)